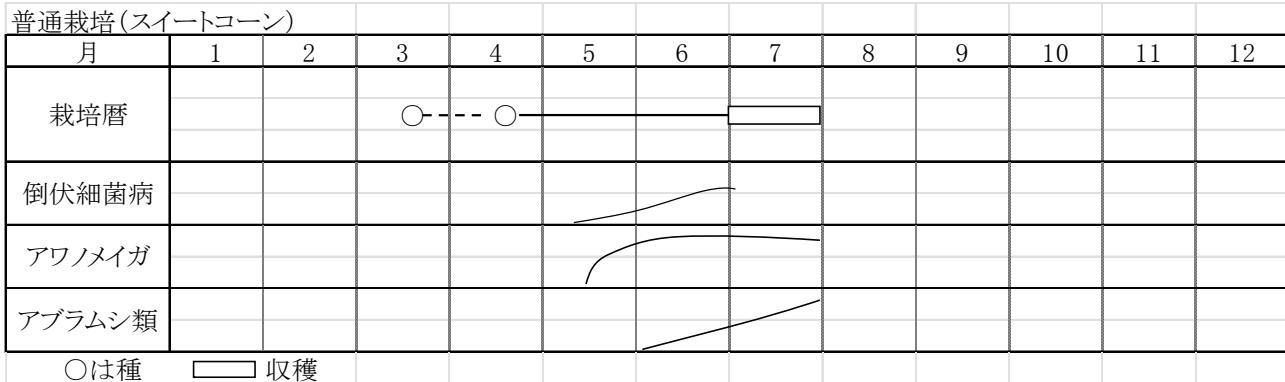


(8) トウモロコシ(スイートコーン)

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期



2 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
倒伏細菌病 (細菌)	①種子伝染するので、50℃で24時間予備乾燥後、70℃で7～10日乾熱処理して消毒する（野菜種子の消毒の項参照）。 ②排水不良畑、地下水位の高い畑はこれらを改善する。 【参考事項】 種子伝染による発病が多い。 5～6月に高温多雨であると多発する。 トウモロコシを含む各種被害植物が翌年の第一次伝染源になる。	登録農薬はない。
黒穂病 (<i>Ustilago</i>)	①発病した株は胞子が飛散しないうちに抜き取って土中深く埋没するなど、適切に処分する。 ②排水不良畑、地下水位の高い畑あるいは風通しの悪い畑ではこれらを改善する。 ③ポリマルチを畑全面に施して、降雨による土粒のはねあがりを防止する。 ④窒素肥料を多用しない。 ⑤連作を避ける。 【参考事項】 特異な菌こぶを形成する。 菌こぶ内に厚膜胞子を形成する。 主要な第一次伝染源は土中で越冬した厚膜胞子である。厚膜胞子は生存期間が長く、土中で7年ぐらい生存する。堆肥としても完全には死滅せず、生き残る場合がある。	登録農薬はない。
アブラムシ類	①ムギ類のほ場近くでの栽培を避ける。 【参考事項】 キビクビレアアブラムシ、ムギクビレアアブラムシが主要種である。	(例) スルホキサフル液剤（トランスフォームフロアブル） (未成熟とうもろこし)
アワノメイガ	①越冬場所となる収穫後の株や茎の太い雑草は除去する。 ②雌花への寄生の足がかりとなる雄穂を受粉後早めに切り捨てる。 【参考事項】 防除適期を逃さず、葉裏、雄しづいに十分薬液がかかるように散布することがポイントである。 老熟幼虫態で越冬し、年3回発生する。 茎、雄穂、雌花などを食入して穂の部分を食害する。	①雄穂抽出始期から雄穂抽出そろい期に防除する。 (例) エトフェンプロックス乳剤（トレボン乳剤） カルタップ水溶剤（パダンSG水溶剤） カルタップ粒剤（パダン粒剤4） クロラントラニリプロール水和剤（プレバソンフロアブル5） フルベンジニアミド水和剤（フェニックス顆粒水和剤）

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
アワヨトウ	①イネ科雑草から幼虫移動があるの で除草する。	①幼虫発生初期に防除する。 (例) エトフェンブロックス乳剤（トレボン乳剤） シペルメトリン乳剤（アグロスリン乳剤）
【参考事項】 長距離移動性害虫で、発生量の差が大きい。 葉を周縁部から中肋を残して食害するためアワノメイガの加害と区別できる。		

<農薬使用時の留意事項>

とうもろこしは収穫する生育ステージにより、穀類（種子を収穫するもの、ある程度成熟した雌穂を収穫するもの（未成熟とうもろこし））と野菜類（幼果を収穫するもの）に分類され、農薬登録上は別の作物になるので注意してください。

しじつ

○子実とうもろこし（とうもろこしの乾燥種子を収穫するもの）

種子を収穫する目的で栽培する子実とうもろこしは「未成熟とうもろこし」には含まれません。

したがって、子実とうもろこしには、「とうもろこし」、「とうもろこし（未成熟とうもろこしを除く）」、「とうもろこし（子実）」のいずれかの登録農薬が使用できます。

○未成熟とうもろこし（スイートコーン）

農薬登録の作物名の「とうもろこし」には、未成熟とうもろこしが含まれています。

したがって、未成熟とうもろこしには、「とうもろこし」、「未成熟とうもろこし」のいずれかの登録農薬が使用できます。

○ヤングコーン（別名ベビーコーン）

未熟な幼果を芯ごと食べるヤングコーンは、穀類の未成熟とうもろこしではなく、野菜類として分類されます。

したがって、ヤングコーンには、「ヤングコーン」の登録農薬が使用できます。

上記を整理すると次のとおりです。

農薬ラベルの作物名	適用作物	作物分類
とうもろこし	子実とうもろこし および 未成熟とうもろこし（スイートコーン）	穀類
未成熟とうもろこし	未成熟とうもろこし（スイートコーン）のみ	
とうもろこし（子実）	子実とうもろこし のみ	
ヤングコーン	ヤングコーン のみ	野菜類